『唐話纂要』における圏点の使用実態について

柯　愛　霞

The Actual Use of “Kenten” in The *“Tou Wa San You”*

KE Aixia

本文主要介绍日本江户时代由当时著名的汉语学者岡岛冠山所编《唐话纂要》假名注音中辅助符号“圈点”的使用情况以及分析这些符号的使用意图。作为当时最早且代表性的汉语教科书和非常重要的语音资料，《唐话纂要》书中所出现的这些符号尚未被详细调查和具体解释。该书中主要有两种辅助记号，均为“圈点”形式，一种是假名右上角的右肩点“ ° ”，用于标记当时日语中不存在的语音，另一种是标在假名和假名之间的中间点“〇”。

本文对原刊本《唐话纂要》中圈点的使用例进行统计分析，得出以下结论：

提示汉字并非按照假名注音发音的右肩点，在「ハ行」和「サ」的使用上不但分别和 [p-]、[ts-] 两个不送气辅音相对应，还分别对应 [p‘-]、[ts‘-] 两个送气辅音；对应元音 [-ə-] 的使用例并非罕见；此外，还零星出现于「悦」、「地」等汉字的假名注音上。

作为隔音符号的中间点，不单出现在「ア段 + ウ」([-a]+[u]) 的情况下，还在「エ段 + ウ」([-e]+[u]) 的情况下被大量使用。由于当时日语 [-a]+[u] 和 [-e]+[u] 已分别融合为 [-o:] 和 [-io:]，因此需要使用隔音符号提示不能按日语的习惯念成 [-o:]、[-io:]，而应该念作 [au] 和 [eu]。

0. はじめに

「唐話資料」とは江戸時代に作られた中国語の学習書のことである。その内、当時の本格的な中国語教科書のスタイルを確立させたのは本稿の対象である当時の代表的な中国語研究者岡島冠山(1674-1728)が編集した『唐話纂要』であった。本稿で扱うのは1716年に京都で刊行された五巻五冊[1]の初版本で、テキストは『中国語教本類集成 補集 江戸時代唐話編 全五巻』所収本を採用する。

五巻の構成は二字話から六字話までの語句、常用慣用句としての常言、会話文である長短話、意味により分類された単語、小曲となっている。対訳方式で、延べ4,349項目の中国語、計15,289字、2,500字種以上の漢字を収録し、全項目に中国語を見出しに挙げ、その下に対応する日本語の意味を示し、見出しの右側に中国語の発音を仮名でだけでなく、当時の日本語の書記体系になかった「圏点」という補助記号なども使って注している。但し、声調は示していない。同書の基礎音系について、主要な先行研究に、有坂(1957)・中田(1978)の「杭州音」、高松(1985)の「南京音と浙江音との混合音」などの見方が分かれている。同書で、中国の戯劇に属する俗曲と呼ばれる大衆的な民謡である巻五の「小曲」の音注は、他の部分に対するのと異なり、清濁の区別がほとんど区別されていないなど顕著な官話の特徴を有する。

『唐話纂要』における圏点はつける場所の違いによって、例のように右肩点と中間点の二種類に分けることができる。以下では、特定の仮名の右肩につくものは「右肩点」、中国語の一音節に対応する二つの仮名の間につくものは「中間点」と呼ぶ。

1　1718年刊『和漢奇談』を追加した六巻六冊の増補本もある。『和漢奇談』は、全ての字に四声を示す点も加えるなど、それまでの五巻と異なる注音方法を採っている。本稿では、対象の均一性の観点から、初版本を使用する。また、字体は原則、原文のものを採用する。同一漢字で複数の字体が存在する場合、使用例数の多い方を採用する。

右肩点：半-パン　再-サ゜イ　没-モ゜　面-メ゜　悦-ヱ゜　地-テ゜イ
中間点：好-ハ○ウ　刀-タ○ウ　口-ケ○ウ　投-テ○ウ

右肩点は特定の発音を示すものではなく、沼本(1990)が、

> 江戸時代に入って将来された唐音資料では振り仮名の右肩に「゜」を加えて、唐音の発音が仮名通りではないことを示す注意点として頻用されている。

と指摘した上、こうした注意点は半濁音符の成立と密接な関係があることを明らかにしている。従って、右肩点と中国語音との対応関係及び具体的な使用状況の解明は必要である。

また、中間点は、「○印は、割って発音する符号である」という奥村(1989)の指摘の通り、唐話資料で割る発音を示す一種の割り点である。最初から中国語音を意識して用いられている右肩点と違って、中間点は本来日本語の表記に用いられるためのものだが、中国語の音注になぜ用いられているのか、その使用実態と意図の解明が必要である。

1. 先行研究と問題の所在

1.1　右肩点について

『唐話纂要』の右肩点に言及した先行研究に、有坂(1938)と奥村(1989)などがあるが、右肩点の使用実態、即ち中国語との具体的な対応について考察したのは沼本(1990)である。

岡島冠山唐話纂要(享保三年〈1718〉刊)

把パア、柄ピン、不プ等[p-]音	主
再サ゛イ、讃サ゛ン、早サ゛ウ等[ts-]音	主
没モ゛、根ケ゛ン、客ケ゛等[-ə-]音	稀

沼本(1990)のこの指摘に従えば、『唐話纂要』では、注意点としての右肩点は、ハ行に対して中国語の子音[p-]、「サ」に対して子音[ts-]に多用し、それ以外は用例が極めて稀だが、中国語の母音[-ə-]を示すものがあるということになる。

しかしながら、この指摘は、以下の四つの点を明らかにしていない。

⑴　ハ行に対する右肩点ははたして中国語の[p-]音としか対応していないかどうか。

⑵　「サ」に対する右肩点ははたして中国語の[ts-]音とのみ対応しているかどうか。

⑶　[-ə-]音の表記例は「没、根、客」3字の他にどんなものがあるか、その使用数が稀であるかどうか。

⑷　上記以外の用例があるかどうか。

これらの疑問点を明らかにするには、右肩点の使用実態についても改めて全体的に把握する必要がある。

1.2　中間点について

唐話資料の割り点について、有坂(1938)と奥村(1989)などに言及があるが、岡島冠山による唐話学習書における中間点に関して、六角(1988)は、

唐通事の唐話教育とは別に、一般の唐話学習書として知られた岡島冠山の『唐話纂要』をはじめ、その他の唐話の書では、カタカナを以て発音を示し、圏点で声調を示したものもある。

と述べ、以下のような例を挙げている。

「好-ハ○ウ」
「高-カ○ウ」
「消-スヤ○ウ」
「○」印を使い、その前後の音が母音同化するのを防いでいる。

「圏点で声調を示したもの」は『唐話纂要』初刊本には存在しないが、「好-ハ○ウ」などは『唐話纂要』にもある例である。

六角(1988)が挙げた中間点の例は全て「ア段+ウ」の例ばかりで、「ア段+ウ」以外の場合の使用例があるかどうかについて言及していない。「口-ケ○ウ」などの「エ段+ウ」の例も存在していることから、中間点の使用実態について、再調査する必要がある。また、その使用意図についても具体的な説明が行われていないため、再検討する必要がある。

2. 右肩点の使用実態と使用意図の分析

『唐話纂要』を字種別に集計した結果は表1のように、右肩点「゜」の使用例は延べ1,255例あり、字種にして210字であり、使用状況は四種類に分けることができる。

本稿の表では、「字種数」は当該使用例が確認された漢字の異なり数、「延べ数」は各字種の延べ数、「用例数」は「使用例」の数を示す。中国語音については、中古音、南方官話の代表である南京音、呉方言の代表であ

る蘇州音の三つを示す[2]。

表1　右肩点の使用状況

分　　類	使用例	字種数	延べ数	用例数
ハ行の仮名に用いられる場合	パ	45	203	198
	ピ	41	152	139
	プ	6	415	405
	ペ	26	107	72
	ポ	22	60	58
	小計	140	937	872
「サ」に用いられる場合	サ゜	45	217	155
「没-モ゜」など[ə]をもつ字に対する仮名に用いられる場合	モ゜	10	134	123
	ケ゜	8	73	32
	テ゜	1	88	1
	ス゜	1	91	62
	ペ	1	7	6
	小計	21	393	224
その他の場合	チ゜	1	14	1
	メ゜	1	36	1
	エ゜	1	2	1
	テ゜	1	21	1
	小計	4	73	4
合　　計		210	1,620	1,255

2.1　ハ行に用いられる場合

ハ行の右肩点の使用状況について、表2により、右肩点がついているのは主に中古音の幫母[p-]、滂母[p‘-]に所属する字であるということが

2　中古音の音価は平山(1967)、南京音は現代南京音の中の旧派(以下は南京音とする)を採用、音価は趙(1929)、蘇州音は音韻データが最も揃っている現代蘇州音を採用、音価は葉(1988)に依拠する。なお、同書の音注には声調が示されていないため、本稿で扱う各音の音価は必要な場合を除き、声調を省略する。

表2　ハ行の右肩点の使用状況

字　母	字種数	延べ数	用例数	使　用　例	南京音	蘇州音
幇[p-]	80	766	749	パ-八撥　パア丶-巴把芭笆耙①粑②　パイ-拜　パ〇ウ-報爆豹保包寶苞褓　パン-半板版班般搬③扮榜幇扳絆謗　ピ-必壁碧畢筆鮅鼈鷴④　ピイ-庇比蔽鵯秘閉轡⑤　ピヤ〇ウ-表　ピン-兵柄冰秉賓餅併拼⑥　プ-不　プウ-補布　ペ-栢伯百　ペヱ-栢檗　ペヱン-奔本　ペン-遍鞭扁蝙匾変蒲邉　ポ-博卜鉢　ポイ-盃背悲貝輩　ポウ-波菠	[p-]	[p-]
滂[p‘-]	35	94	88	パ-潑叭　パア丶-怕葩　パイ-派　パ〇ウ-泡砲抛　ピ-僻劈疋　ピイ-批披譬撇　ピヤ〇ウ-漂票嫖摽　ピン-品　プウ-普舗　ペ-珀魄　ペン-片騙⑦偏　ペヱン-噴　ポ-撲扑拍朴　ポイ-配　ポウ-頗破	[p‘-]	[p‘-]
並[b-]	19	71	29	パ-鈸　パア丶-杷　パイ-排　パ〇ウ-鮑　パン-棒　ピイ-被稗　ピン-牝　プウ-蒲　ペ-別白帛苫⑧箔⑨　ペン-瓣　ポ-泊勃　ポイ-佩　ポン-棚	[p-]/[p‘-]	[b-]
暁[h-]	1	7	6	ペ-黒	[x-]	[h-]
明[m-]	2	2	2	ピ-蔑蟻	[m-]	[m-]
見[k-]	1	1	1	ポイ-鵙	[k-]	[k-]
非[f-]	1	1	1	パン-販	[f-]	[f-]
その他	2	2	2	パア丶-祀　パン-欅		
合　計	141	944	878			

※①「耙」:『広韻』未収、『康熙字典』は「必駕切」で、幇母に所属。
②「粑」:『漢語大字典』にしか収録されず、発音は「巴」などと同じ[pa]で、声母は無声無気の両唇破裂音。
③「搬」:『広韻』未収、『字彙』に「今俗音作般」とある。
④「鷴」:『広韻』未収、『集韻』に「必益切」とある。
⑤⑥「轡、拼」の南京音は[p‘-]。
⑦「騙」:『広韻』などに未収。訳が「ダマサル」となっているため、「騙」と見なす。
⑧「苫」:『広韻』未収、『集韻』に「薄陌切 音白」とある。
⑨「箔」:『漢語大字典』に「音同箔」とあり、「箔」は『廣韻』では「箔-傍各切」で並母に所属。

分かる。なお、並母[b-]に所属する字も少数ではあるが、存在している。また暁母と明母などの例も確認された。

右肩点が幇母の字に用いられるのは延べ80字種749例で、滂母の字に用いられるのは延べ35字種88例である。[p-]と[p‘-]は共に無声の両唇破裂子音で、両者の違いは無気か有気であり、この対立は現代各漢語方言においても保持されている。両唇破裂音[p-]については、沼本(1990)は、「当時の日本語の音韻に存在していなかったものである」と述べている。即ち、日本語の半濁音符と呼ばれる音韻がまだ成立していなかった当時、これらの中国語の無声の両唇破裂音は仮名表記通りに発音してはならないことを注意する必要があったと考えられる。

また、先行研究には言及がない全濁声母並母[b-]に所属する字の一部にも右肩点がついていることが確認され、延べ19字種29例である。中古音の全濁声母は官話系方言では無声化し、失われたのに対して、呉方言では失われず、清濁の対立が維持されている。『唐話纂要』にある並母の字は、全69字種、延べ305字で、その内、251字が濁音仮名で音注され、濁音仮名による音注の比率は全体の80%以上に達している。並母以外の全濁声母も原則濁音仮名で音注され、清濁の対立を維持する呉方言の特徴を色濃く反映している。ところで、表3の並母の字はいずれも用例数が少ないが、字種が少ないとは言えない。これには、いくつかの理由が考えられる。

先ず、「鮑、瓣」2字は『広韻』に全濁声母の読みしかないが、『集韻』などでは全濁音声母の他、全清または次清の読みもある。「鮑」は『広韻』では「薄巧切」で、「薄」は並母だが、『集韻』には「披交切」「班交切」もあり、「披」は次清、「班」は全清である。「瓣」は『広韻』では「蒲莧切」で、「蒲」は並母だが、『集韻』には「匹見切」の読みもあり、「匹」は次清である。この2字に対する右肩点はこうした[p-]と[p‘-]音に対応していると見ることが

表3　並母字における右肩点の使用状況

字種	使用例	延べ数	用例数	字種	使用例	延べ数	用例数	字種	使用例	延べ数	用例数
鮑	パ〇ウ	1	1	杷	パア丶(バア丶)	2	1	牝	ピン	1	1
瓣	ペン	1	1	稗	ピイ	1	1	排	パイ	3	3
被	ピイ(ビイ ボイ)	4	1	泊	ポ	1	1	勃	ポ	2	2
蒲	プウ(ブウ)	3	1	苣	ペ	1	1	佩	ポイ	3	3
棒	パン(バン ハン)	4	1	菹	ペ	1	1	棚	ポン	2	2
別	ペ(ベ)	16	4	帛	ペ	1	1				
白	ペ(ベ ヘ)	23	2	鈸	パ	1	1				

※括弧はそれ以外の音注を示す。

できる。

次に、「被、蒲、棒、別、白」5字に対する右肩点は全て官話音の音注がなされている巻五の「小曲」に集中して使われている。これらの濁音声母の字は「小曲」以外の部分ではほとんど濁音と音注されていることから、付されている右肩点は「小曲」の官話の特徴を示すものと考えられる。

更に、使用数が1回のみの例について、「杷」は幇母の「把-パア丶」による類推の可能性が高い。「稗」は蟹摂二等(主母音は半広音)の字で、「ピイ」とは韻母が一致しないため、「卑」(幇母三等)による類推の可能性が高い。

「泊、苣、帛、鈸、牝、排、勃、佩、棚」9字の内、「泊」については、『集韻』に「匹陌切、音拍」と次清音の読みもあり、音は合うが、意味「竹密貌」は『唐話纂要』の「東漂西泊」と合わない。これらの字に対する右肩点は南京音に対応できるが、呉方言から適切な説明は困難であり、今後の課題とせざるを得ない。

なお、その他の「袙-パア丶」「攀-パン」2字は『広韻』『康熙字典』『大漢和

辞典』『漢語大字典』などの字書には収録されておらず、「袙」は日本語の意味が「トロメン」となっていることから、「絹、木棉」意味の和製漢字である「袙」を誤記したもので、音注「パア丶」は「巴」を類推したものと考えられる。「攀」の「パン」はその声符である「攀」(次清[p‘-]) と同じ音である。

暁母と明母の3字種については、先ず、注目すべき例は暁母の「黒-ペ」である。岡島冠山が編集した『唐話類纂』に同じ例が見られ、下記のように沼本(1990)によって母音[-ə-]に対する注意であると指摘されている。

岡島冠山唐話類纂(享保十年〈1726〉刊)

黒ペ等hə音
諱ポイ等həi音　} 稀

しかし、『唐話類纂』より10年前に編纂された『唐話纂要』に存在していることは管見の限り、言及されていない。

表2のように、『唐話纂要』で7回出現した「黒」は右肩点の用例数が6例占める。ハ行につく右肩点は全て中国語の両唇音に対応しているが、「黒」だけは違う。「黒」は喉音の暁母[h-]字で、現代漢語で唇音に転じたという報告は一切ない。そして、南京音[xə]と蘇州音[hə?]とも[-ə-]をもつことから、ここの右肩点は両唇音という子音ではなく、沼本(1990)の指摘通り、[-ə-]という主母音に対応するものである。

次に、明母の「蔑-ピ」「蠛-ピ」2例だが、2字とも鼻音の山摂四等の字である。山摂四等の字はエ段になるのが一般的だが、イ段となるのは問題である。反切「莫結切」で、蘇州音で[miə?]、南京音で[mie]となっている。声母の面でも、中国語の発音の変遷においては、鼻音から無声の両唇音への変化がなく、同書でもこの2例だけである。従って、この二つの字に対する右肩点については、別の字の発音を注したものと考えられる。

「鵙」について、『康熙字典』に「扃闃切」とあり、見母錫韻の字である。声母と韻母との何れも「ポイ」と合わないため、声符「貝-ポイ」による類推の結果と考えられる。非母の「販」については、南部呉方言、特に衢州地区の多くの地点において「反」などの軽唇音は白話音では重唇音と区別がないという現象が知られている。このことから、「販」の音注「パン」はそのような重唇音の読みをもつ声符「反」による類推の結果である可能性は否定できない。

上記の検討により、並母[b-]所属字への右肩点の用例数が例外的なものであり、右肩点は主に中古音の幇母[p-]、滂母[p‘-]と対応していることが明らかになった。[p-]と[p‘-]は共に無声の両唇破裂子音であることから、ハ行に対する右肩点は、「黒」を除き、中国語の無声の両唇破裂音に対応するのがその使用意図であるということを明白に知ることができる。右肩点が対応する無声の両唇破裂音には無気の[p-]のみならず、有気音の[p‘-]も含められているため、右肩点は中国語の[p-]音と対応しているだけでなく、[p‘-]音とも対応しているということが言える。

2.2 「サ」という特定の仮名に用いられる場合

「サ」に右肩点が用いられる用例は延べ155例で、字種は45字である。表4の通りである。

これらの字の中国語中古音の声母は主に歯頭音の精母[ts-]、清母[ts‘-]、正歯音の莊母[tʂ-]、初母[tʂ‘-]に属している。官話系方言では、[ts-]と[tʂ-]、[ts‘-]と[tʂ‘-]が対立をおおむね維持しているのに対して、呉方言では、その区別はなく、[ts-]と[ts‘-]に合流している。この四つの声母の共通点は全て破擦音の無声声母で、有気か無気かがその違いである。よって、サに対する右肩点は破擦音を示すのがその意図であることが分かる。

ここでも、いくつか全濁声母に右肩点が付される例が見受けられる。

表4　「サ」に対する右肩点の使用状況

字　母	字種数	延べ数	用例数	使　用　例	南京音	蘇州音
精[ts-]	12	51	45	サ゜イ-哉載再災　サ゜ン-讃 サ゜○ウ-竈早遭槽藻枣蚤	[ts-]	[ts-]
清[ts‘-]	12	69	65	サ゜イ-采猜彩菜綵　サ゜ン-慘飡滄 艙①蒼鶬　サ゜○ウ-草	[ts‘-]	[ts‘-]
莊[tʂ-]	8	20	19	サ゜-札扎紮　サ゜イ-債齋 サ゜○ウ-爪　サ゜ン-斬盞	[tʂ-]	[ts-]
初[tʂ‘-]	7	10	10	サ゜-察檫刹揷　サ゜イ-差 サ゜ン-瘡　サ゜-柵②	[tʂ‘-]	[ts‘-]
從[dz-]	4	63	14	サ゜イ-才在　サ゜○ウ-皂造	[ts-]	[z]
心[s-]	1	1	1	サ゜○ウ-搔	[s-]	[s-]
澄[ɖ-]	1	3	1	サ゜ン-綻	[tʂ-]	[ɖ-]
その他	1	1	1	サ゜ン-酴		
合　計	45	217	155			

※①「艙」:『広韻』未収、『大漢和辞典』に「船倉の俗字」とあり、「倉」は清母。
②「柵」:南京音は[ts‘-]。

從母の3字「才」「在」「造」と澄母の「綻」に対する右肩点の使用例の「才-サ゜イ」1例、「在-サ゜イ」9例、「造-サ゜○ウ」2例、「綻-サ゜ン」1例は全て「小曲」のものであり、2.1で挙げた並母の例と同じく、官話の特徴を有する「小曲」の用例である。また、「皂」は「皁」の俗字で、『康熙字典』によれば、「皁」には「俗読若竈、義同」があり、「竈」は精母の字で、「サ゜○ウ」はこのような読みの反映と考えられる。心母の「搔」について、用例数1例しかなく、「蚤-サ゜○ウ」からの類推である可能性も考えられる。

上記の他に、「酴」も確認され、『漢語大字典』に収録されているが、音と意味のいずれも合わず、「滄艙-サ゜ン」などからの類推によるものと考えられる。

以上の考察によって、[ts-]と[ts‘-]はともに無声の破擦音子音で、「サ」に対する右肩点は、中国語の無声の破擦音を示すのがその使用意図であり、『唐話纂要』の「サ」に付される右肩点は[ts-]のみならず、[ts‘-]にも対

応しているということが明らかになった。

なお、『唐話纂要』ではこれらの声母は、後接する母音が[i][e][o]の場合、「゜」を用いずに、[a]という母音が後接する場合のみ右肩点が付されている。一方、わずかながら、以下のように、一部の「ツア」[3]の表記も存在している。

差-ツア、6例　詐-ツア、2例　参-ツアン1例　潸-ツアン1例
簪-ツアン1例　撣-ツアン1例　窜-ツアン1例　鑽-ツアン1例
斬-ツアン1例　草-ツア〇ウ1例

計 10 字種 16 例である。「サ゜」と「ツア」の関係について、沼本 (1990) でとりあげられた黄檗唐音資料の代表的なものである『慈悲水懺法』〈寛文十年 (1670) 刊〉の巻末に付されている中国語の表記法についての説明に、

サ゜字音自歯頭而出猶合ツア二字而呼之也如……凡旁音有二音合為一音者ツア字之類是也

とあり、中国語の [tsa] と [ts‘a] は「サ゜」と「ツア」二種類の表記法があることを示している。『唐話纂要』においても、「サ゜」と「ツア」の両方が使われているが、「サ゜」の方が主であることが分かる。

2.3　「没 - モ゜」など [-ə-] の母音をもつ字に対する仮名に用いられる場合

沼本(1990)は[ə]の母音をもつ字に対応するものとして、「没」「客」「根」3例をとりあげ、これ等の例が稀であると指摘しているが、表5のように、

3 「ツア」で表記された「茶-ツア」1例「査-ツア、」1例「才-ツアイ」1例「纔-ツアイ」1例「在-ツアイ」3例「財-ツアイ」2例「楂-ツア、」1例「暫-ツアン」1例の濁声母の8字も存在する。

ほとんど[-ə-]という主母音をもっているこれらの例は南京音と蘇州音と対照した結果では、「没」「客」「根」以外、19字種の[-ə-]をもつ字に右肩点が付され、即ち、[-ə-]をもつ字に右肩点が付される字は、計21字種に上るということが分かった。また、全ては中古音の一等と二等の字で、陽声韻字(10字)と入声韻字(11字)で、その中で、「夢」を除き、主母音がいずれも[-ə-]である。「夢-モ゜ン」の場合、蘇州音では[ən]と[əŋ]のような対立がなく、[ən]と[oŋ]は補い合いの関係である。

また、これらの字の用例数は、21字種を合わせて224例に達し、字種別の出現頻度でも、「没」への右肩点の使用率が95％近くに達するなど、高い使用率を有するものも多く、字種の面においても字種別の使用数においても決して稀ではないという事実が分かる。

なお、2.1で取り上げた「黒-ペ」の場合、右肩点も子音に対する注意ではなく、母音に対する注意であるということはこの表から見て明白な事実である。

表5　「没」類の右肩点の字種と使用頻度

字種	延べ数	用例数	使用例	南京音	蘇州音	字種	延べ数	用例数	使用例	南京音	蘇州音
没	76	72	モ゜	[mə]	[məʔ]	墨	3	2	モ゜	[mə]	[məʔ]
根	4	1	ケ゜ン	[kən]	[kən]	黙	3	3	モ゜	[mə]	[məʔ]
客	20	11	ケ゜	[k‘ə]	[k‘əʔ][k‘ɑʔ]	陌	1	1	モ゜	[mə]	[məʔ][mɑʔ]
格	1	1	ケ゜	[kə]	[kəʔ][kɑʔ]	脉	2	2	モ゜	[mə]	[məʔ][mɑʔ]
克	1	1	ケ゜	[k‘ə]	[k‘əʔ]	麦	6	5	モ゜	[mə]	[məʔ][mɑʔ]
更	18	4	ケ゜ン	[kəŋ]	[kən][kã]	門	20	19	モ゜ン	[məŋ]	[mən]
庚	4	2	ケ゜ン	[kəŋ]	[kən][kã]	們	11	10	モ゜ン	[məŋ]	[mən]
肯	24	11	ケ゜ン	[k‘əŋ]	[k‘ən]	悶	8	8	モ゜ン	[mən]	[mən]
坑	1	1	ケ゜ン	[k‘əŋ]	[k‘ən][k‘ã]	夢	4	1	モ゜ン	[məŋ]	[moŋ]
生	91	62	ス゜ヱン	[səŋ]	[sən][sã]	黒	7	6	ペ	[xə]	[həʔ]
得	88	1	テ゜	[tə]	[təʔ]	計	393	224			

※蘇州音で二つの発音を有する漢字は、葉(1988)によると、前が文語音で、後が口語音。

2.4　その他の場合

『唐話纂要』では、2.1から2.3までの場合以外にも、右肩点の用例が確認されている。表6のように、「悦-ヱ゜」「地-テ゜イ」「面-メ゜」「虫-チ゜ヨン」の4字種における右肩点がその例である。これらはいずれも先行研究に指摘のない例で、いずれも1例のみであり、右肩点の意図は次のようにも考えられる。

表6　その他の場合における右肩点の使用状況

字種	延べ数	用例数	使　用　例	南京音	蘇州音
悦	2	1	ヱ゜(ヱ1例)	[yə]	[yəʔ]
地	21	1	テ゜イ(デイ15例テイ5例)	[ti]	[di]
面	36	1	メ゜(メン35例)	[mien]	[miɪ]
虫	14	1	チ゜ヨン(ヂヨン13例)	[tɕʻoŋ]	[zoŋ]

①「悦 - ヱ゜」の場合

「悦」は喩母の合口字で、円唇の前舌介母[-y-]を有する。延べ2例で、音注は「ヱ゜」と「ヱ」各1例である。ここの右肩点は日本語にない円唇の前舌母音[-y-]に対する注意点であると考えられる。[-y-]音の表記法として、『唐話纂要』では「雨-イユイ」「玉-ヨ」「曲-キヨ」「月-ヱ」「雪-スヱ」と様々な試みが見られ、一定しておらず、「゜」もそうした試みの一つであろう。

②「地 - テ゜イ」の場合

「地」は定母止摂三等の字である。延べ21例あり、「テ゜イ」は1例のみで、他は、「デイ」15例と「テイ」5例ある。前述の『慈悲水懺法』の表記法にある「如テ゜ト゜字須合上下歯而呼之猶不正呼其軆而唯呼其用也」という説明に従えば、「テ゜」の右肩点は[ti]に対する注意であるということになる。「デイ/テイ」は、仮名表記だと、[dei] / [tei]になってしまうため、そうならないように、注意する必要もあったと考えられる。

③「面 - メ゜」の場合

「面」に対する音注は、「メン」が35例で、「メ゜」が1例しかない。「メ゜」は「メ゜ン」の「ン」が脱落したものと考えられる。「面」は明母山摂三等の字で、介音[i]があり、「メン」は、仮名表記だと、[men]になってしまうため、介音[i]があり、[mien](メィン)であることを注意をする必要があったと考えられる。

④「虫 - チ゜ヨン」の場合

「虫」は澄母通摂の三等の字である。14例の内、「ヂヨン」が13例で、「チ゜ヨン」が1例のみである。『慈悲水懺法』では、「チ゜」に関する説明がされていないが、沼本(1990)によって、

助ツ゜　阻ツ゜　麁ツ゜
猪チ゜ユ　軸チ゜ユ　厨チ゜ユ　暑チ゜ユ　柱チ゜ユ　} tsü ～ tʃü

のように、「チ゜」は「母音の内曖昧母音 (「ü」)」、「子音の内、破擦子音「ts-」「tʃ-」」を写すものと解釈されている。「虫」の母音は「ü」ではないことから、「チ゜」の右肩点は破擦子音に対する注意点として解釈できる。沼本 (1990) によって取りあげられた唐音資料にある実際の使用例を通して、黄檗唐音資料以降、「チ゜」の使用がほとんど消滅したと考えられるが、同書では、「虫 - チ゜」は 1 例しかないが、存在している。従って、単なる誤記ではなく、破擦子音に対する注意記号として使われた可能性があると思われる。

このように、「悦」「地」「面」は母音、「虫」は子音に対する注意であると説明することも可能である。字種別の使用比率は低いが、中国語音との日本語音の違いを何とか示そうとする著者の試行錯誤を窺わせるものとして無視すべきものではないと思われる。

以上、右肩点の使用状況を考察した結果、先行研究が明らかにしなかった疑問点について、以下のようにまとめることができる。

⑴　ハ行に対する右肩点は、一部の例外を除き、中国語の無声の両唇破裂子音の無気音[p-]のみならず、有気音[p‘-]にも対応する。但し「黒-ペ」には該当しない。

⑵　「サ」に対する右肩点は、[ts-]のみならず、無声破擦子音[ts‘-]にも対応する。

⑶　母音[-ə-]をもつ字に対する右肩点は、多くの字種と高い使用頻度を有する。「黒」に対する右肩点もこの分類に入る。

⑷　上記以外に、「悦」「地」などに対する右肩点の使用例も存在し、しかも、それぞれに右肩点の使用理由が考えられ、無視すべきではない。

3. 中間点の使用実態について

表7で明らかなとおり、中間点の「〇」を使用例は延べ1,437例で、字種にして235字であり、全て「～ +ウ」の条件下で用いられている。段別に見た場合、「イ段+ウ」「ウ段+ウ」「オ段+ウ」の用例がなく、「ア段+ウ」と「エ段+ウ」だけに集中している。つまり、『唐話纂要』では、「ア段+ウ」「エ段+ウ」が中間点の使用環境であるということが分かる。この235字種の内訳は、「ア段+ウ」が183字種、「エ段+ウ」が52字種である。以下、それぞれの使用状況について考察する。

表7　中間点の使用環境

環境		該当の有無	使　用　例	字種数	延べ数	用例数
ア段	+ウ	○	高-カ○ウ	183	1,142	1,122
イ段		×	九-キウ	0	0	0
ウ段		×	布-フウ	0	0	0
エ段		○	口-ケ○ウ	52	378	315
オ段		×	可-コウ	0	0	0

3.1　「ア段+ウ」の場合

「ア段+ウ」の場合は表8のように、延べ1,142字に、中間点の使用例は1,122例あり、計183字種である。「財」「鱟」を除き、181字種は全て中古音の効摂に属する字である。

「財」の場合について、中間点の表記の他、「財-ツアイ⑵/ヅアイ⑽」の12例がある。「財」は蟹摂の字で、韻尾が[i]であるため期待される音注は「イ」であり、「ツ(ヅ)アイ」がそれを反映している。「チヤ○ウ」は原音との対応からも、用例数からも、誤記である可能性が高い。匣母流摂一等の字である「鱟」は「ヘ○ウ」の表記が期待されるが、「ガ○ウ」の表記となっている。『唐話纂要』における匣母の字はア･ヤ･ワ行かハ行の表記とされている一方、匣母がガ行となるのは日本呉音の特徴であることから、中国語音を写したものではない可能性が高い。

表8にある効摂の字を等位別にした結果：一等の字は全て直音表記[-au]、三等と四等の字は全て拗音表記[-iau]となっているのに対して、二等の字だけは、直音[-au]と拗音[-iau]の二つに分かれている。王(1980)によれば、三等と四等の字が拗音[-iau]で表記されているのは四等の字は口蓋化で三等の字と合流した中国語の変化を反映している。

二等の字の状況はやや複雑である。先ず、「飽,爆豹泡砲抛苞鮑包,胞鉋跑,貌猫錨」のような唇音、「拗」のような喉音影母字、「鐃鬧」のような舌

表8 「ア段+ウ」における中間点の使用状況

等位	一等[au]	二等[au]	三等[ɪɛu]	四等[eu]
使用例	ア○ウ-懊豪① カ○ウ-考膏高告羔靠篙熬 ガ○ウ-傲熬**盤(流摂)** サ○ウ-燥噪掃臊嘈早艸竈遭 サ゛○ウ-槽藻蚤皂搔枣遭早艸竈造 タ○ウ-倒刀套到搗討逃桃道 ダ○ウ-盜陶萄稲導鋾桃道逃 ナ○ウ-腦②惱腦 ハ○ウ-好號耗毫蒿鏖襖豪抱暴有③ バ○ウ-報保宝褓 バ○ウ-暴袍抱 マ○ウ-帽毛 ラ○ウ-牢老劳捞涝 ツア○ウ-艸 ヅア○ウ-造 チヤ○ウ-**財(蟹摂)**	サ○ウ-梢 サ゛○ウ-爪 ナ○ウ-鐃鬧 ハ○ウ-拗飽 パ○ウ-爆豹泡砲抛苞鮑包 バ○ウ-胞鉋跑 マ○ウ-貌猫錨 ヅア○ウ-棹 ヤ○ウ-咬 キヤ○ウ-交教佼巧敲狡蛟鴾撓絞膠較鉸鮫攪覚 スヤ○ウ-稍梢梨④ チヤ○ウ-炒鈔嘲 ヂヤ○ウ-嘲 ヒヤ○ウ-孝	ヤ○ウ-腰要邀鷂搖謠鰩 キヤ○ウ-喬嬌驕橋蕎 ギヤ○ウ-橋蕎 シヤ○ウ-少燒 ジヤ○ウ-擾饒 スヤ○ウ-宵小消硝咲鞘蛸 チヤ○ウ-招照朝 ヂヤ○ウ-兆朝 ツヤ○ウ-焦蕉椒鷦 ヒヤ○ウ-嚣票表 ピヤ○ウ-漂摽票表 ビヤ○ウ-鰾螵瓢 ミヤ○ウ-苗妙	ヤ○ウ-尭 キヤ○ウ-叫僥澆驍 スヤ○ウ-穉⑤簫 チヤ○ウ-苕 テヤ○ウ-弔挑跳雕彫 デヤ○ウ-調篠條掉 ニヤ○ウ-鳥 ヒヤ○ウ-曉梟 ピヤ○ウ-嫖 ビヤ○ウ-嫖 リヤ○ウ-了料寥撩聊蓼繚鷚
字種数	69	44	41	29
延べ数	458	123	294	267
用例数	445	118	292	267

※① 「豪」などの二種類以上の音注をもつ字は、用例数の少ない方は____、同数の場合は____で示す。表9も同じ。

② 騷は『広韻』未収、『唐話纂要』で意味「メノウ」となっているため、「瑪瑙」の「瑙」と見なす。「瑙」音「乃老切」。

③ 「有」は『広韻』などに収められていない。現代北京音では、発音が[mau]となっているが、[au]となる字の多くは中古音で効摂一等に属していたことから、効摂一等として扱うことにした。

④ 梨は『広韻』未収、『集韻』に音「所教切」とある。

⑤ 「穉」は『広韻』未収、『康熙字典』によると、「髦」と同じ、音「蘇彫切」である。

音、「梢爪」のような歯音などは口蓋化せず、直音を維持していることを反映している。次に、「咬,交教佼巧敲狡蛟鵁撓絞膠較鉸鮫撹覚」のような牙音、「孝」のような影母以外の喉音の字は拗音[-iau]でうつされているのは口蓋化が起きたことを反映している。

更に、「嘲」のような舌上音の知組、「稍梢槊,炒鈔」のような正歯音の照組の字及び三等に属する「朝兆」のような舌上音知組、「少焼,招照」のような正歯音照組の字は、拗音表記となっている。また、三、四等に属する「宵小消硝咲鞘蛸,焦蕉椒鷦;毳簫」のような歯頭音精組の字も拗音表記である。このように、舌上音と正歯音が歯頭音と同じ拗音になるのは呉方言の特徴で、呉方言では多くの場合、三者が対立を失い、歯頭音に合流している。

3.2　「エ段+ウ」の場合

「エ段+ウ」の場合の中間点の使用状況を表9に示す。延べ378字に、中間点の使用例は315例あり、計52字種である。「嫂」「雛」「去」を除き、49字種は全て中古音の流摂に属する字である。

効摂の字「嫂」と遇摂の字「雛」「去」の3字種について、「嫂」は効摂一等の字で、「サ〇ウ」の表記が期待されるが、例の「嫂（スエ〇ウ）嫂（スエ〇ウ）」には2字とも「スエ〇ウ」となっている。この表記は「搜」と同じく「スエ〇ウ」で表記されていることから、諧声符による類推の結果と考えられる。「雛」は遇摂三等の字で、「ヅヲ」の表記が期待されるが、「ツエ〇ウ」となっており、「皺縐」の諧声符による類推と考えられる。「去」は遇摂の字で、延べ59例中、58例の表記は「キユイ」で、「ユ」と「イ」の合音で、原音の[-y]に対応している。用例数からの原音との対応からも一例のみ、「ツエ〇ウ」となっているのは「走」の類推によるものと思われる。

表9にある流摂の字を等位別にした結果：一等と三等の字は例外なく、

韻母が[-eu]となっている。王(1980)によれば、ここには、流摂の一部分の三等字は非唇音(例外あり)の一等の字と合流していたことが反映されている。

表9　「エ段+ウ」における中間点の使用状況

等位	一等[əu]	三等[iəu]
使用例	ケ○ウ-勾口叩寇枸苟鈎頭①狗② ゲ○ウ-偶 テ○ウ-兜斗透偷抖閏豆投蚪頭 デ○ウ-痘豆投頭 ヘ○ウ-候厚後猴 メ○ウ-牡某　シ○ウ-蝼③ レ○ウ-樓漏喽篓摟 スエ○ウ-**嫂(効摂)** ツエ○ウ-走凑　ソエ○ウ-走④ ヱヘ○ウ-鷗摳嘔	ケ○ウ-拘 テ○ウ-丢 ヘ○ウ-否覆 メ○ウ-謀 スエ○ウ-搜 ツエ○ウ-皺愁縐**雛去(遇摂)** ヅエ○ウ-驟愁 ウエ○ウ-浮枹
字種数	38	14
延べ数	280	98
用例数	277	38

※①「頭」は定母字で、延べ64例で、「デ○ウ」49例、「テ○ウ」13例、「デ○」1例と「ケ○ウ」1例である。「テ○ウ」は濁点漏れ、「デ○」は「ウ」の記入漏れ、「ケ○ウ」は誤記であると思われる。
②「狗」は、延べ7例で、「ケ○ウ」6例、「キユイ」1例である。流摂字のため、韻尾「イ」と対応できない。「拘-キユイ」による類推の誤記と考えられる。
③「蝼」の表記「シ○ウ」は「レ○ウ」の誤記と考えられる。
④「走」は延べ40例で、「ツエ○ウ」38例、「ツエ○」1例、「ソエ○ウ」1例である。「ツエ○」は「ウ」の記入漏れ、「ソ」は「ツ」による誤記と考えられる。

先ず、「謀」のような明母の字は中古以降、唇音の声母の後に介音[i]がくることができないので、一等の「牡某」などと合流したため、同じ[-eu]となっている。

また、「否覆,浮枹」のような軽唇音声母の字に対する表記は唇音以外の一等と同じ、[-eu]となっている。これらの字も一等の字と合流したからである。

さらに、「搜,皺愁縐,驟」などの歯上音の三等の字は王(2004)によれば、反り舌音による影響を受け、斉歯呼から開口呼へ変化したため、一等の

字と合流した。従って、表記も[-eu]となっている。

一方、『唐話纂要』において、例えば、「救-キウ」「球-ギウ」「就-ツユウ」「修-シユウ」などのように、音注が[-iu][-iuu]となっているのは、もう一部分の流摂三等の字〔牙喉歯(頭)音〕が前舌介音を維持しているからである。

以上のように、中間点の「○」の使用例は高い使用率で中古音の効摂と流摂の字に使われていることが分かった。効摂と流摂、この二つの摂の共通点は韻母が複合母音で、同じ母音韻尾[-u]を有するという点である。現代漢語方言では、効摂と流摂のあり方に大きな違いが見られ、蘇州音を代表とした北部の呉方言では、単母音化で[-u]を失ってしまったのに対して、官話系方言と永康音を代表とした南部の呉方言では、母音韻尾[-u]が保存されている。

3.3　使用意図の分析

中間点の使用意図については、当時の日本語における仮名遣いと実際の発音とのずれに原因があると考えられる。

日本語では、上記の「高-カウ」などの「ア段+ウ」と「口-コウ」などの「オ段+ウ」は元々別音であった。小松(1980)に、次のような指摘がある。

> 鎌倉時代以後、室町時代にかけて、-au, -eu, -ouという結び付きのすでに
>
> 京(kjaŋ)>kjau>kjao*>kjɔ:
>
> 興(kjoŋ)>kjou>kjo:
>
> 今日(けふ)(keFu)>keu>kjou>kjo:
>
> という変化が起こり、オ列に二種類の長音が生じた。…これらの区別は江戸初期までにほぼ失われ、単一のオ列長音が成立した。(『国語学大辞典』「長音」)

即ち、『唐話纂要』が編纂された当時の日本語では、開音「ア段+ウ」と合音「オ段+ウ」、「エ段+ウ」と「(拗音)ヨ+ウ」は表記上では違う形態を示しているが、実際の発音では区別を失い、それぞれオ段長音とオ段拗長音に合流していた。そこで、表記と実際の発音にずれが生じていたことに対応して、中間点を入れて注しているのである。

『唐話纂要』では、例えば、表10に示した例のように、

表10　仮名表記における日本語音と中国語音の不一致

例	音注	対応する中国語音	当時の仮名表記の読み
高	カウ	kau	コー
口	ケウ	kəu	キョー

「高」の場合、[kau] を仮名で写すと「カウ」となるが、「カウ」という綴りの発音は当時の日本語では既に「コー」となってしまったため、「カ」と「ウ」の間に「〇」を入れて、「コー」ではなく、「カ・ウ」と割って発音するように注意している。「口」の場合、[kəu] を「ケ〇ウ」に写している。「ケウ」の発音は当時の日本語では「キョー」になってしまったため、「ケ」と「ウ」の間に「〇」をいれて、「キョー」ではなく、「ケ・ウ」と発音するように注意している。

中間点は、「ア段+ウ」だけでなく、「エ段+ウ」の場合にも用いられ、当時の日本語では「ア段+ウ」が「オ段+ウ」、「エ段+ウ」は「(拗音)ヨ+ウ」へ合流したため、仮名表記と実際の発音にずれが生じていたことを反映しているのである。

4. 終わりに

以上、『唐話纂要』における右肩点と中間点の考察を通して、以下のことが明らかになった。

右肩点について、日本語の音韻にない発音の注意記号として、ハ行においては、一部の例外を除き、中国語の無声の両唇破裂子音の無気音[p-]のみならず、有気音[p‘-]にも対応する。但し「黒-ペ」には該当しない。「サ」に対しても、破擦子音の無気の[ts-]のみならず、有気の[ts‘-]にも対応する。母音[-ə-]をもつ字に対する用例は、その字種は少ないとはいえず、使用頻度が高いものも少なくない。また、極めて稀な用例だが、「悦-ヱ゜」「地-テ゜イ」などの存在も無視できない。

中間点について、『唐話纂要』では「ア段+ウ」だけでなく、「エ段+ウ」の場合にも用いられている。中間点の使用は当時の日本語ではオ段長音の開合が対立を失い、「ア段+ウ」は「オ段+ウ」、「エ段+ウ」は「(拗音)ヨ+ウ」への合流による仮名表記と実際の発音との間にずれが生じていたことを反映している。

資料(五十音順)

漢語大字典編輯委員會編纂(2010)『漢語大字典』(九巻本・第2版)四川出版集團・四川辞書出版社/湖北長江出版集團・崇文書局

周　祖謨(1960)『広韻校本』中華書局(2011年影印本)

丁　　度　等(宋)『集韻』中華書局(1989年影印本)

張　玉書　等(清)『康熙字典』中国書籍出版社(1997年現代検索[潘本善編]影印本)

趙　元任(1929)「南京音系」『科学』第13巻第8期(『趙元任語言論文集』商務印書館2002年再録)

長澤規矩也　解題(1972)『唐話纂要(六巻)』『唐話辞書類集(第六集)』汲古書院

諸橋轍次(1989-1990)『大漢和辞典』(修訂第2版)大修館書店

葉　祥苓(1988)『蘇州方言志』江蘇教育出版社
李　新魁(2006)『韻鏡校証』中華書局
六角恒廣[編 解題](1991)『中国語教本類集成「復刻版」第1集』不二出版
六角恒廣[編 解説](1998)『中国語教本類集成 補集 江戸時代唐話篇 全五巻』不二出版

参考文献(五十音順)

有坂秀世(1938)「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」『国語と国文学』昭和13年10月『国語音韻史の研究』(1957年再録増補新版)三省堂
袁　家驊　等(2001)『漢語方言概要(第二版)』語文出版社
王　　力(1980)『漢語史稿』(2004年重排本)中華書局
岡田袈裟男(2006)『江戸異言語接触－蘭語･唐話と近代日本語』笠間書院
奥村佳代子(1996)「岡島冠山『唐話纂要』考」『関西大学文学会紀要』第17号
奥村佳代子(2007)『江戸時代の唐話に関する基礎研究』関西大学出版部
奥村三雄(1989)『九州方言の史的研究』桜楓社
国語学会[編](1980)「長音」「長音符」「開合」『国語学大辞典』東京堂出版
曹　志耘 等(2000)『呉語処衢州方言研究』好文出版
高松政雄(1985)「近代唐音弁－南京音と浙江音－」『岐阜大学国語文学』第17号
中田喜勝(1978)「日本に於ける華音の声母『ツ』･『キ』について」『長崎大学教養部紀要. 人文科学. 』1978,18
沼本克明(1990)「半濁音符史上に於ける唐音資料の位置」『国語学』162集
沼本克明(1997)『日本漢字音の歴史的研究－體系と表記をめぐって－』汲古書院
沼本克明(2013)「半濁音の源流」『歴史の彼方に隠された濁点の源流を探る』汲古書院

樋口　靖[訳](1983)詹伯慧[著]『現代漢語方言』光生館
平山久雄(1967)「中古漢語の音韻」『中国文化叢書1 言語』大修館書店
森田　武(1992)「音韻の変遷(3)」『岩波講座日本語5 音韻』岩波書店
林　武實(1988)「岡嶋冠山著『唐話纂要』の音系」『漢語史の諸問題』京都大学人文科学研究所
六角恒廣(1988)「附論 長崎唐通事と唐話」『中国語教育史の研究』東方書店
魯　宝元･呉　麗君[編](2009)『日本漢語教育史研究 江戸時代唐話五種』外語教学與研究出版社